



真珠貝の話

— もう一つのバリアフリー問題 —

去る6月、大阪城内で開催されたG20の歓迎夕食会の乾杯のスピーチで安倍総理が創建以来の歴史を振り返りながら、こういうことを口にししました。「天守閣は今から約90年前に16世紀のものが忠実に復元されました。しかし一つだけ大きなミスを犯してしまいました。エレベーターまで付けてしまいました」。

ところが、翌日、ある高名な障碍をもった方が障碍者への配慮を欠いた発言と、「朝から、とっても悲しい気持ちになる」とツイートしたそうです。早速、新聞がこれを報じ、果たして、事あれば総理を批判しようと身構えている野党が「(首相の) 感覚が全く理解できない」、「多様な人々の人権を一顧だにしない」と非難したそうです。専門の立場からなのか、これは、ある大学教授の発言で、「ジョークのつもりか？しかし、バリアフリーの世界的趨勢に逆行することを言って、ウケるとでも思ったのか。スピーチライターは、何を考えて原稿を作ったのか。読み上げた首相本人に判断力はないのか」と激怒したとか。なるほどなあ〜と思いました。

数日後、総理も障碍者や高齢者の方々が『不自由でも仕方がない』と聞こえたことは遺憾なこと、バリアフリーに異を唱えるような発言ではない」と弁明したということです。

そんな話を聞きながら、今日 ^{こんにち} 何につけ話題になるバリアフリーということについて気になっていたことがあるものですから、全く違ったバリアフリー問題なのですが、少しお話ししようと思ったわけです。

もう30年ほど前のことになりましたが、西洋、日本、中国思想、キリスト教学、イスラム学といった専門を異にする仲間が集まって、叢書を出版していたことがありました。グローバル化していく時代、異なる文化圏に生きる人々がお互いにバリア、つまり対立や葛藤を抱えながら、なお理解しあうことが如何にして可能なのかといった時代の課題を探っていこうということが私たちの主たる動機でした。

その第一巻目を担当した友人が、こんな文章から書き始めました。「真珠貝は体内に生じた望まぬ異物を核としてあの美しい真珠をうみだしてゆくのだという。人間の宗教や思想にも、これに似た創造作用がそなわっていないだろうか。〈異質なもの〉に反応して、新しい〈なにか〉を自らの内にうみだし、より豊かな内実を創出してゆく^{*}」。なかなか巧みな表現と感心したことを覚えています。

ところが、昨年、人から頼まれて20世紀の哲学者のヤスパースという人がハイデルベル

ク大学で行った「大学の生き生きとした精神について」という講演を翻訳したことがあります。「生き生きとした精神に」という言葉自体は、同じドイツの同時代人の文学者のグンドルフによるもので、ヤスパースが講演を行った講義館の正面外壁には今でもこの言葉が掲げられていますが、その講演録に同じような「真珠貝の話」を発見し、ちょっと驚くと共に、懐かしい気持ちになったわけです。

そこには、こうありました。「真珠が真珠貝の中の傷ついた異物によって育っていくように、人間の生き生きとした精神は、深く毀損されることから生まれてくるのです。苦悩した人間たちこそ、挫折した人間たちこそが、それを経験しなかった者が獲得し得なかった生き生きとした精神を生み出すことが出来るのです」。

バリアや挫折など無しに生きることが出来れば、その方がいいに決まっていますが、善きにつけ悪しきにつけ、価値に対する関心を棄て去ることの出来ない人間が作る社会には、如何なる時代、如何なる人生にも必ずバリアや葛藤はつきまとい、バリアや挫折無しに人生を送れる人などどこにもいはしないのです。豊かな才能と富に恵まれたゲーテでさえ、自分の苦悩を昇華させるために、已むに已まれず『若きウェルテルの悩み』を書き、あの『ファウスト』の中で、天上の神をしてこう語らしめました。「人は、努力する限り、迷うものである」。

私たちが住まう現実には、認識の対象に止まる単なる静物ではなく、私たちの挑戦を跳ね返す抵抗物です。人が本当の自信、即ち自分に対する信頼を手にしようと思うなら、その抵抗物を受け止め、明暗伴う人生経験を実際に実践する以外にはない。「ぞうきんをもって学ぶ」ということの深意は、恐らくそういうところにあるのでしょう。

※月本昭男・竹内整一編『宗教と寛容 ―異宗教・異文化間の対話に向けて』（宝積比較宗教・文化叢書 第一巻）大明堂

[>前のページへ戻る](#)